

日本発の国際学校で学んだ子どもたちは今

～「日本メキシコ学院」の二文化教育の成果を探る～

齋藤 さくら¹・田中 京子

要旨

本稿は、メキシコに1977年に設立された国際学校「日本メキシコ学院」で行なわれている二文化教育が生徒たちに与えた影響について、在籍時の生徒たちの作文等、および修了後10年以上経たした生徒たちへの質問紙調査を通して、縦断的に調査し考察した調査報告である。調査の結果、二文化教育は在籍当時だけでなく、10年以上を経た現在まで影響しており、特にお互いの文化の長所とされる特徴を体得したと感じられている。日本人生徒たちにとっては、自由や平等、主体性、メキシコ人生徒たちにとっては、根気や礼儀、規律等である。同時に多角的視点から世界を見られる国際性を持った人間が育ちつつあると考えられる。

効果的な言語教育についてなど、理想と現実の中で接点を見つけるべき課題も多くあり、今後国際学校の発展のために関係者の力を結集する必要がある。

キーワード

国際学校、二文化教育、異文化教育、異文化交流、多文化教育

目次

1. はじめに
2. 調査の目的
3. 日本メキシコ学院設立の経緯
4. 日本メキシコ学院の二文化教育の特徴
5. 設立10年までを過ごした生徒・修了生の異文化体験
6. 異文化体験が与えた影響

7. 多文化理解教育への示唆

8. 今後に向けて

1. はじめに

19世紀末からラテンアメリカは多くの日本人移民を受入れてきた。その一国であるメキシコに1977年、日系人・日本企業、日本政府、メキシコ政府など多くの機関や個人が協力して国際学校「日本メキシコ学院」が設立された。海外の日本人学校とは異なり、同じキャンパスの中でメキシコと日本のそれぞれの教育課程に準拠した初等～中等教育が実践され、且つ両国文化の交流を促進するための活動が行われてきた。

日本文化を核に集った様々な立場の人々が、30年以上にわたっていわば「日本発の」国際学校「日本メキシコ学院」を育て、多くの若者たちがこの学院から育っていった。(スペイン語正式名称は“Liceo Mexicano Japonés”であり、通称として「日墨学院」または「リセオ」と呼ばれることがある。本稿では以降「学院」と記す。)学院10周年を迎えようとしていた1986年に発行された『学院要覧 86-87』の挨拶文の中で、理事長であった平沢胤敏氏は「将来、当学院から日墨両国の事情、文化をよくわきまえた国際性豊かな多くの卒業生が出て、必ずや両国の利益に役立つ日のあることをお約束申し上げ、尚一層の御指導、御協力、御援助をお願い申し上げます。」と述べている。日本とメキシコの教育文化の交流をはかり、世界の平和と繁栄に貢献する人材を育成するという高邁な理想は、どのように現実のものになってきているのであろうか。

筆者である田中と齋藤は共に、この学院で過ごした経験を持つ。田中はこの学院が10周年を迎えた1987年

¹ メキシコ名は Martínez Saito Sakura

までの3年間、教員として特にメキシコ人生徒への日本語教育と、文化交流活動の仕事に携わった。また斎藤はメキシコで生まれ育つ中で、1992年までの10年間この学院に在籍し教育を受けた。筆者たちは、これまで国際開発や異文化理解教育の分野で研究や教育に携わる中で、学院の独自性と大きな可能性に改めて気付くようになった。

学院設立30年を迎えようとする今、学院の教育成果の一端を明らかにしたいと考えている。

2. 調査の目的

日本発の国際学校「日本メキシコ学院」の設立初期15年間に学院に在籍した生徒たちの、在籍時の様子およびその後の姿の一端を調査することにより、在学時の経験、特に言語や文化の学習、交流活動がその後の進路や人生にどのような影響を与え、現在それを本人がどう感じているのかについて考察する。言語・文化交流や相互理解教育の成果の一端を長期的視点から縦断的に調査することにより、学院の教育を見直すための基礎としたい。

また、その基礎に立って、国際学校のあり方、異文化交流のあり方について示唆を得るため、これまで行われてきた二文化教育・国際教育研究の理論的枠組みや教育実践をふまえながら今後の研究につなげることができると考える。

3. 日本メキシコ学院設立の経緯

19世紀末から始まった日本人のメキシコ移民は、20世紀の後半になって二世、三世、四世の時代を迎える時代となっていた。一方日本は、第二次世界大戦後急速な経済発展を遂げ、日本経済や日本社会が世界から注目されるようになっていた。メキシコに在住する日系人および日本人の間では、子どもたちが増えるにも関わらず教育機関が不足している現実の中で、充実した教育を受けさせたいという切実な要求と共に、メキシコ・日本両国の文化がより親密に結ばれてほしい、日系メキシコ市民として教養を受けた二世、三世、四世が、父母の祖国が日本であるという立場から、日本の発展をメキシコ発展のために活かし貢献してほしい、という強い願いがあった。複数あった日系人のための日本語学園を統合して初等教育・中等教育を行な

い、またメキシコ人生徒も共に勉強できる学校を設立するという構想が、「日系人コロニヤ」と呼ばれる日系人社会の人々の間で1972年にまとめられた。日本語・スペイン語によって40ページにわたってまとめられた『総合学園建設運動趣意書』（1972年2月、松本三四郎・日墨協会会長および発起人一同）には次のような一節がある。

「此れからの日系人子弟は、スペイン語を自国語として、日系人の特徴をいかす為の日本語と、世界共通語の英語をマスターする事は是非必要であります。日系人がメキシコの高等教育を受けて、知識階級の社会に入った場合、日本人の容貌からしても日本に対する知識を持って居る事が常識となってきます。…総ての点から考慮して、日系人コロニヤ将来のためにも、又日系人としてメキシコの為に尽くす上にも、立派な日系人学校の建設が必要であります。」

特筆すべきは、当時の日系人の間で、日本語・日本文化を核として日系人の子どもたちを教育するだけでなく、メキシコ人の子どもたちをも教育することによってメキシコに貢献するという意識が生まれていたことである。『日本メキシコ学院十年の歩み』（1987年、毎日新聞社刊）の中で、学院創立者の一人中谷敷正人氏（当時 JETRO メキシコ所長）はメキシコのドイツ校を見学したことによる「国際的目覚めのステップ」について、次のように記している。

「目からうろこが落ちるとはこのことをいうのでしょうか。…（ドイツ学校、仏墨学院、ユダヤ系校、英国校、オランダ校等）この欧米諸国の海外学校のあり方は、現地への貢献や文化交流が単にお義理や金ですまされるものでなく、知恵を出し、汗を出し、ともに学び、ともに鍛え合ってこそできるものだということを教えてくれるが、それを何の気負いもなく、しごく当然のこととして行っている姿は、きわめて教訓的である。…このように学院構想は、過密からの脱出という動機から始まって、日本連合を経て、欧米諸国並みのことはしなければという意識の目覚めにいたる。」

1974年、メキシコの教育大臣ブラボ・アウハ大臣が日本を訪問し奥野文部大臣と会談した際、日本メキシコ学院の設立が提唱され、同年メキシコを訪問した田

中首相とエチェベリア大統領との会談の結果、共同声明において「日本メキシコ学院の設立は両国民の相互理解のために画期的な重要性を有するものであって、早期建設を支援する」と発表された。その後日系社会とメキシコに進出していた日系企業が一体となって寄付活動を行い、日本政府からの援助金と合わせて1976年に建設工事が着工された。

1977年日本メキシコ学院が開校し、以来30年近くに渡って国際人育成のための教育を標榜し、主にメキシコと日本の子ども達を教育している。10周年を迎えた1987年には、大規模なシンポジウムが学院を会場にして開催された。開校から30年を迎えようとする現在まで、学院は日本の文部科学省のカリキュラムに準拠した日本コース（小中学校）とメキシコ教育相のカリキュラムに準拠したメキシココース（小中高等学校）、および日本・メキシコ共学の幼稚園において、全生徒1,000名以上が在学する国際学校として独自の教育を継続している。

4. 日本メキシコ学院の二文化教育の特徴

学院の建学の精神は「日本・メキシコ両国民の相互理解の増進」、「日本・メキシコの教育文化の交流」という二国間の理解・交流推進、そして「人類の連帯感を育み、世界の平和と繁栄に貢献しうる国際性豊かな、かつ両国民にとって有為な人材を育成する」という国際人育成が謳われており、その精神に沿った教育が工夫されてきた。

先に述べたように、メキシコ教育省のカリキュラムに沿ったメキシココースと、日本の文部科学省のカリキュラムに沿った日本コースが学院敷地に共存し、生徒はその国籍に関わらず、入学時にコースを選択できる。メキシココースには日系人以外にも、日本人との血縁が全くないメキシコ人も在籍している。また日本コースは日本企業駐在員の子どもたちが中心であるが、メキシコで生まれ育った子どもも在籍している。幼稚園にも日本コースとメキシココースがあるが、教

育は混合で行っている。高等学校はメキシココースだけが存在している。幼稚園以外のすべてのコースとレベルに共通しているのは、授業に日本語またはスペイン語学習がとり入れられていること、また日本文化・メキシコ文化を学ぶ授業や活動があること、そして相互交流の場となる行事や活動が教育活動として導入されていることである。

いわゆる「二言語教育」とは異なるこの二文化教育環境の中では、主な教育言語は日本語かスペイン語のどちらか一方であり、毎日の教科学習は、日本コースでは日本の文部科学省から派遣された教員が日本語を使って行い、メキシココースではメキシコ教員がスペイン語を使って行なう。この点では、メキシコにある一般の私立学校、そして在外日本人学校と変わりがない。しかし日本語・スペイン語の授業、および文化学習、交流活動は別の担当が中心になって行なったり全学で取り組んだりしている。課外活動も文化交流を目的としたクラブ活動や院内ホームステイ、別コースへの体験入学等、また1987年からは日本への研修旅行が行なわれている²。さらに、同じ学院敷地に常に異文化背景を持った生徒たちや教師たちがいて、その中で規則や校風、人間関係、いわば「潜在的カリキュラム」³が形成されている点も特徴としてあげられる。

5. 設立10年までを過ごした生徒・修了生の異文化体験

学院設立10年を記念して発行された『日本メキシコ学院十年の歩み』の第6章は「子どもたちの声」と題され、20名以上の在学学生や修了生の意見が掲載されている。これらは主に日本コースの子どもたちによるものであるが、ほとんどの子どもたちが、思い出や強く残る印象として異文化交流を挙げている。一方、メキシコ人の生徒たちの声は、ほぼ同じ時期を学院で過ごした生徒たちによって編集された『1985年～1986年高校卒業文集 思い出をたいせつに』から読み取ることができる。ここには33名の作文が掲載されている。

² この研修旅行を実現させるためにメキシコ・日本双方で多くの人々が協力し、例えば日本コースで教鞭をとった後日本に帰国していた遠藤伴雄氏（現在横浜市立茅ヶ崎小学校校長）は、横浜市の学校での生徒受け入れ等に尽力した。第1回旅行については日本メキシコ学院編集の『Primer Viaje de Intercambio Cultural 日本文化交流旅行 1987夏』に詳細が掲載されている。

³ 潜在的カリキュラムは概念が多義的であるが、ここでは学校のフォーマルなカリキュラムの中にはない、知識、行動の様式や性向、意識やメンタリティが、意図しないままに教師や仲間の生徒から教えられていくことを指す。「見えないカリキュラム」「隠れたカリキュラム」といわれることもある。

上記2つの文集の50名以上の作文を詳細に読むと、異文化との交流についての捉え方は子どもの年齢によって異なっており、次のように分けることができる。

(1) 生活の中で体感する文化の違いと共通性

ある幼稚園児の声が次のように表されている。「幼稚園には二人の先生がいる。一人はぼくのようにスペイン語を話す。もう一人は、話していることがぜんぜんわからない。ある日、なぜおもしろい話し方をするの?と聞いたら、二人の先生がにこにこしてぼくを抱きしめた。お母さんのようにぼくを抱きしめた。ぼくと同じことばを使わなくても、先生はぼくのことを好きだ。」学院生活の中で自然と、言葉の違いと人間性の共通点を体感していることがわかる。

(2) 行事を通して楽しむ異文化

小学生低学年生徒の多くが、クリスマス、運動会、体験入学等、学院内での行事について述べている。(以下、原文のまま。)[「行事のときには、メキシコ・コースの人たちと一しょに楽しめます。」「今(体験入学に)来ている友だちも『楽しかったな』とってくれるように、ぼくたちも親切にしてあげたいと思います。』」など、交流行事を通して異文化に接するのが楽しいという気持ちの表現である。

(3) 生活の中で葛藤しながら認識する異文化

高学年になると、行事だけでなく日常生活の中での接触を通して、異文化に関する学びや気づき、葛藤が表されている。「はじめはメキシコ人なんてやだと思っていたけど、2年4ヶ月たった今では、少しはメキシコになじんできました。」「(運動会で)メキシコ人ていがい(意外)と親切だなあ、と思いました。」「メキシコ・コースの人たちは、休み時間にサッカーのじゃまをしたりして、いやなこともあったけど、本当はいい人です。」

中学生の意見は異文化接触の葛藤や喜びから、交流への新たな希望や提案を表すものが多い。「子どもの日のディスコなどがあり、(メキシコ・コースの人は)とても親切です。…ちょっと気になります。それはうるさいことです。…これからの日墨学院は、もっと交流をふかめてほしいと思います。」「わたしにはぜんぜんメキシコ人の友だちがいません。それに、友だちがほしいなあと思ったこともありません。…運

動会で、みんなでメキシコ・コースの人に声をかけて、仲良くなって、プレゼント交換をしたりしました。…わたしは、そのあとも、いろいろ話しをしたりすればよかったと思います。それにはスペイン語をもっと勉強しようと思います。」「メキシコ人たちとの交流も形だけのもので、一人ひとりが本当にメキシコ人と友好的であったであろうか。スペイン語の授業でもきまじめにうけていただろうか。という僕もまじめでいた。いつのまにか僕たちは、こうして日本では体験できない部分を忘れてしまっていたのではないだろうか。」「日本コースもあのメキシココースの積極性に習って、何事にもはずかしがらずに、自分から話しかけるようにすればいいと思います」など、日常生活レベルでの交流の難しさを感じながらも、その価値を認め、希望を持っていることがうかがえる。

(4) 潜在的カリキュラムを通して意識する異文化

国際学校が真の国際学校であるための潜在的カリキュラムの重要さは従来より指摘されているが(ウィルス1993)、その中でも校風や人間関係が与える影響は大きい。日本での「国際理解教育の実践の大きな障壁になっているのが、実はこの見えないカリキュラムである」(佐藤1995,p.51)というほど、国際理解教育の理想と学校現場の現実の乖離が大きいといわれている。

興味深いのは、記念誌の中で中学生の多くが校則や先輩・後輩の関係について言及していることある。「先輩との関係も日本と違い、かたくるしいお辞儀がなくてのびのびしている。」「日本のたいていの中学校とは違うところがいくつかあります。先輩、後輩の関係のありかたです。…1年から3年まで楽しく親しいつき合いがあります。」「厳しい校則で縛られることもない、先輩と後輩のへだてもない、そういう学校でわたしたちは強い刺激も受けず、かなり自由なことをしていると思います。」など、自由な校風について語っている。日本では校則や生徒間の上下関係が厳しい学校が多いことを生徒自身が情報としてまたは体験として知っており、それとの比較で自由を楽しんだり疑問を持ったりしていた様子である。

一方、メキシコ人の生徒の作文を読むと、修学旅行や行事の楽しさ、親しくなった友だちとの別れのつらさ、日本語や日本文化を学べたことのよさを綴ったものがあるが、33名のうち9名が、主に校則や校

風について述べている。このテーマがいかにメキシココース生にとって大きな関心事であったかがわかる。日本コースの中学生たちが自由だったと言うのは全く反対に、自由がなかった、校則が厳しすぎたという意見である。同じ学院の中で校風についてこのように感じ方が分かれるのは、中学生と高校生という年齢の違いもあろうが、生まれ育った文化との比較によるところが大きいと推察できる。実際メキシコの教育誌 *Educación*2001 (1996) の中で教育学者 María Esther Ibarra は、学院全体の教育の特徴を“Disciplina y Formalidad”（規律と礼儀）と表しており、日本人生徒に自由を感じさせる校風が、メキシコ文化から見ると規律正しく礼儀を重んじるものと感じられていることがわかる。

「学校というものは生徒と先生がいてこそ成り立つものなのだから、やはり生徒の意見もとり入れるべきだと思う。」「あまりすきでないことは学校ではわたしたちがやりたいことを、させてくれなかったことです。もうすこし自由にしてくれれば私はもっと言うことをきくようになります。」「リセオは生徒のことをもっと自由にさせて自分のやりたいことをもやらせたらいいのではないのでしょうか。」「生徒が自分たちで選択することを許さない制度があり、生徒のために一番よいことを選ぶにあたってでも学校がやっぺてしまいます。…生徒に動機づけをする代わりに罰を与えます。」「生徒たちが大人になり十分な判断力をもつために、もっと自由があったほうがよいと思います。」「(授業でのスポーツが)じゅうぶんではありません。そのほかに自分が運動をしたくても先生がいなかったら、おいだされます。」など、生徒たちの自由な活動が管理されることについての意見が他にも多くあった。日本コースの生徒たちの意見とは対称的なのが注目される。

また二文化環境の中で自らのアイデンティティーに関する気持ちを述べている人もみられる。日系の高校生の中には「リセオで、メキシコ人、日本人、私みたいな三世の人と、毎日をすごしたのはいいけいけんでした」「(自分のことが)ときどきふめいになります。メキシコ人なのか、日本人なのか、それともどちらでもないのか。…今、うまくりょうほうの文化を保持することはできない。」など、両方の文化を併せ持つ学

院で学んでこそ持った考えだと言えよう。

6. 異文化体験が与えた影響

では、在学時の異文化体験が、その後どのような影響を与えていると認識されているのであろうか。メキシココース・日本コースいずれかで小・中・高等学校時代のうち3年以上を過ごし、卒業後現在まで10年以上を経た人を対象に、知人のつてなどを頼って郵送および電子メールを使ってアンケート調査をした。このグループは、設立後約15年の時点で学院に在籍していたことになり、前項で取り上げた記念誌や文集の執筆者グループと同一人物とは限らないが、同時期、または少し後の時期を学院で過ごしたグループである。学院での、言語・文化の授業や行事、または学院の環境を通して、日本あるいはメキシコについて関心、知識、共感度、実際の関係が強くなったと感じているか、そして国際的な視野を身につけるきっかけになったと感じているか、また受けた教育が現在どのような影響を与えているかについて質問した。⁴

【調査時期】2005年12月～2006年1月

【アンケート配布数】約120通（同年代の修了生がメーリングリストを作成している場合にこれを利用したが、正確な登録数が把握できないため配布数も概算数）

【回答数】18通（回答率 約15%）

ほとんどの修了生たちが働きざかりの30歳代にあることもあってか、回答を得るのが非常に難しかった。以下回答を紹介し、回答数による限界を理解したうえで結果を考察する。

(1) 外国語の授業から受けた影響

18名の回答者のうち外国語（日本語またはスペイン語）の授業が好きだったのは半分以下の7名で、好きでなかったのも7名、どちらでもなかったのが3名である。現在その言語において母語に近いぐらいの能力がある人もいれば、ほとんど覚えていない人もいる。日系メキシコ人にとっての日本語や、メキシコ在住が長かった日本人にとってのスペイン語については母語と同じぐらいの能力があるとしているが、それ以外の場合言語能力はあまり高くない。外国語の授業への印

⁴ 質問紙の日本語版は添付資料1（同じ内容でスペイン語版も配布し、回答者が望むほうで回答してもらった）、結果は添付資料2を参照。

象、取り組み、その影響については個人差が大きいようである。記述欄の中では、語学としてのより効果的な教育が行なわれていればもっと実力をつけられたであろうという意見が目立った。

しかし外国語をあまり覚えていないと答えたすべての人が、日本語またはスペイン語を、近い将来またはいつか勉強したいと希望している。その理由として、小さい時にせつかく接したから、好きだから、今後役に立つはずだから、また、日系人の場合には自分の子どもたちに正しい日本語を伝えたいから、という回答があった。子どもの時には外国語の授業にあまり興味が持てなかった場合でも、後になってもっと学びたいという気持ちになることがあるのがわかる。

(2) 異文化の授業から受けた影響

外国語の授業と共に文化についての授業が行なわれていた時期もあり、これについての印象を聞いたところ（質問紙E-3）、外国語の授業は好きでなかった人でも文化の授業については好きだった場合があり、11名が好きだったと答えている。好きでなかったとする回答者はメキシココースの1名のみであり、どちらでもないとしたのが3名、あとの3名は授業がなかった、または覚えていない、と回答している。「小学校4年生の時、一ヶ月に1回（日本に長年滞在した経験があるメキシコ人教員による）日本の生活についての授業があり、とても好きだった」などの意見があり、異文化に関する授業が、外国語の授業に比べて受入れやすく興味深かったことが考えられる。

(3) 行事や交流活動から受けた影響

文化交流の行事や活動については（質問紙E-5）、授業よりも更に好きだったとする人が増え、14名が好きだった、1名が好きでなかった、それ以外はどちらでもないと回答している。行事については言及も多く、正月のもちつきやメキシコの死者の日、運動会、など印象に残っているようである。「運動会は、現在の仕事の中でもプラスの経験となっている。」と回答したメキシココース修了生がいた。複数の日本コースの子どもたちが特に印象に残ったこととして、メキシココースから招待を受ける「ディスコ・ダンスパーティー」を挙げている。中学生がディスコで踊るといふのは、その頃の日本人にとっては常識を超えたものであり、この行事が与えたインパクトは大きかったよ

うである。また、メキシココースの中高生の中では、1987年から開始された日本研修旅行について貴重な経験だったと言及する人が複数おり、参加した人には大きな影響を与えたようである。

また、クラブ活動は、日本で多くの中学生が行なうような長時間の厳しい活動はなかったため日本人コース修了生からはそれが物足りなかったという意見があった。逆にメキシココースの卒業生からは、クラブ活動での交流が自然でよかった、人間教育の場を提供していたという意見があった。

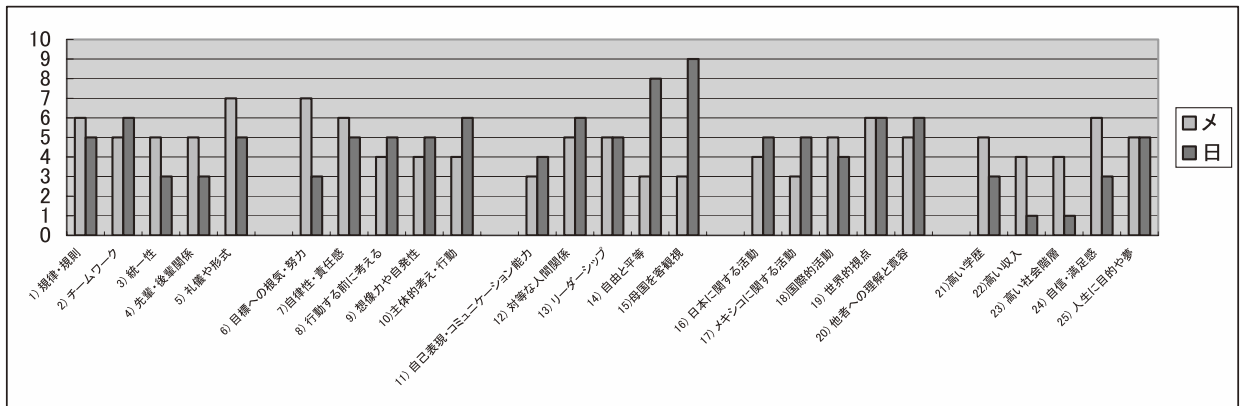
(4) 学院の環境(潜在的カリキュラム)から受けた影響

学院の全体的な教育環境については（質問紙D-7,8, D-12）18名中16名がよい環境だったと評価している。そのうち日本コースの6名、メキシココースの1名が「非常によかった」としており、あとは「よかった」である。コースによる差があることが注目される。

メキシココースに在籍した人からは、幼稚園または小学校から高等学校まで同じ仲間たちが進学し絆を深めたことによって「最良の友人」ができたことを高く評価する回答が多かった。日本コースに在籍者からは「(メキシコの中の日本人という) 特殊な環境にいた」せいか、異文化を受け入れる気持ち、新しく来た人をすぐ受け入れる気持ちが培われたというような、やはり人間関係についての記述が多かった。「職業においては、大学教育が就労の機会や収入に影響を与えたが、自分自身の成長は親と学院によってもたらされた」という意見がメキシココース修了生からあった。学院の雰囲気や環境の中での人間形成には独特のものがあつたようである。

また校則について「厳しかったが、日本文化の影響なので理解が必要」という記述が1件あったが、それ以外には、当時のメキシココース生の文集で触れられていたような厳しい管理に関する感想は見られなかった。これについては後述するが、年月が経って、よい仲間たちとの関係を継続する中で印象が変わってきたのかもしれない。

二つの文化が共存する学院で「両コースの差異が目立っていたので仲介役がいるとよかった」と、円滑な交流を望む声や、また体育館やプールなどの施設が充実していた学院についてそれを評価し、しかし十分な活用には課題があることを指摘する声も複数あつた。



メ：メキシココース修了生 日：日本コース修了生

グラフ1：学院教育の現在への影響（影響があったとする回答者の人数）

いずれにしても、15名が学院の教育によってお互いの国についての知識が増えた、14名が「興味」が増加した、そして13名が「共感度」が上ったと回答している（質問紙D-9,10,11）。これらについての否定的回答は1名または2名であり、学院の教育や環境が概ね、相互理解の増進につながったと感じられていることがわかる。

(5) 学院の教育がその後の進路に与えた影響

現在までの進路においては（質問紙F）、メキシココース修了生は、日本と実質的な関係をもつ人はないものの、日本に対して興味を持つようになり、共感するようになった人がそれぞれ5名、3名おり、自国を客観的に見られるようになったと感じる人もいる。日本コース修了生では、メキシコへの興味が増した6名と共に、実質的な関係を持つに至った人が5名、共感度が増したとする人も4名いた。在籍時には意識していなかった人でも、10年以上経た現在影響を受けていると感じているのが興味深い。

現在の仕事や生活において、学院の教育の影響がどのように反映されていると感じるかを聞くために、25の項目について質問した（質問紙F-3）。回答で「はい、非常に」と「はい、ある程度」を合わせたのが上記グラフ1である。学院の影響を受けたと思われることとして多いのが、日本コース修了生の「母国を客

観的に見られるようになった」（9名）および「自由や平等に価値を置くようになった」（8名）、「主体的に考え行動するようになった」「世界的視点を持つようになった」「理解や寛容の心を持って他者と接するようになった」（各6名）、およびメキシココース修了生の「自分の目標に向かって根気強く努力するようになった」（7名）、「礼儀や形式を大切にするようになった」（7名）、などである。

質問項目はラテンアメリカと日本の文化を比較する様々な調査⁵から抽出されたものであり、日本コース修了生の多くは日本人がメキシコ文化の特徴と感じる自由・平等や主体性を学び、これが現在まで影響していると認識されている。メキシココース修了生は、ラテンアメリカの人々に日本文化の特徴と捉えられる事が多い根気強さや規律、礼儀正しさを学び、これが現在まで影響していると感じている例が多い。

また両コース生とも6名ずつが、「世界的な視点を持つようになった」と回答している。これは、日本コース修了生の「母国を客観的に見られるようになった」と共に、自文化以外の視点から世界を見るという、国際理解に欠かせない要因である。

⁵ Tanaka 1997 "Japan as seen from Latin American students in Japan", 『日本語・日本文化論集』第5号 pp 1-28, 「メキシコ留学が個人にもたらした影響について～日墨交流計画に参加した日本人元留学生へのアンケート調査から～」, 『留学生交流・指導研究』Volume 7, pp.1-15等。

7. 多文化理解教育への示唆

学院の二文化教育は、それぞれの国の教育状況や国民性が関係し、各自が背景として持つ文化の特徴によって、異なる影響を与えてきたようである。総じて言えば、互いの文化の長所とされる文化的要因を学びとり、それが進路に影響を与えてきたと考えられる。また、建学の精神のひとつである「国際性豊かな人材」育成についても、必ずしも二国間の関係の中で仕事をしているわけではないが、互いの国について知識や興味を持ち、自ら主体的に行動し、世界的な視点から物事を見られる人間が育っているのは確かである。

在籍時には気付かなかった教育内容や環境の価値が、10年以上経て、各自に影響を与えていることが自覚され評価されて、ある時はそれを十分に活用できなかったことが反省されて、未来につながられている。つなぐ先は将来の自分自身の学びや子孫の学びである。1986年に理事長平沢胤敏氏が述べた「将来、当学院から日墨両国の事情、文化をよくわきまえた国際性豊かな多くの卒業生が出て、必ずや両国の利益に役立つ日のあることをお約束申し上げ…」の言葉が現在、実現されつつある時代に入っていると言えよう。

文化交流においては、出会い後の交流を各自の自発性だけに任せるのは十分でなく、「再会ミーティング」を行なって自発性を継続させるのが重要だと言われている⁶。幼年期・少年期の学院での二文化教育を「異文化との出会い」の機会ととらえると、今後修了生に対して何らかのフォローアップがあれば、この二文化教育の効果が大きくなるであろう。その意味で、開学30周年の機会は、同窓生たちにとっても大きな意味をもつと考えられる。

今回取り上げた、学院の歴史前半約15年の課題としてあげられるのは、授業としての外国語が子どもたちにとってあまり魅力的と感ぜられてなかったため、現在に至る効果があまり実感できないことである。もっと学べればよかった、学んでおけばよかったという後悔の声がある。それに比べて異文化理解の授業や

交流活動が、生徒にとって取り組みやすく学習効果があったと感ぜられていることを考えると、言語学習についてもなんらかの改善ができるであろう。日本に帰国すれば受験が待っている日本コース生のカリキュラムにスペイン語をどれだけ位置づけられるか、国際語として英語が主流となっている世界の中で、日本語やスペイン語にどれほどの時間を費やすことができるか、など課題は大きい。さらに、学院設立以前から重要視されていた英語学習についても、修了生は、より効果的な教授方法があるはずだと感ぜている。これら言語学習の課題については、学院の後半期15年で工夫がされていることと思うが、当時の課題としてあげておきたい。

また、二コース間の交流が十分あったとは感ぜられていないこと、自文化と異文化を自明のものとして区別する傾向が生まれ易かったことが、自由記述から汲み取ることができる。異文化間教育の今日的課題である「自文化」「異文化」の捉え方については、国際学校の教育を考えていくうえでも重要な検討事項であろう⁷。

二つの文化が共存するキャンパスで問題に感ぜられていたことに、コースごとの財政状況の問題もあった。日本の文部省（現在は文部科学省）から助成金がかかる日本コースと、メキシコ教育省下にあるメキシココースでは財源が異なり、それによって使用できる施設などに差があると生徒たちに感ぜられていた様子で、生徒たちの目からは「差別」と移っていたことをうかがわせる記述があった。同様の問題は設立当時にも議論されたことのようなのである。（毎日新聞社1987,p.67）

以上の課題が示すように、異文化接触・交流は、経済格差や言語の社会的地位など、現実的な問題が付随しており、心の交流・文化の交流という側面からだけは考えられない。この点を常に心に留めながら、高い理想と厳しい現実の接点を探っていくことが重要であろう。これは、二文化の交流を目的として設立された学院が名実ともに「国際学校」として発展し、二文化を核としながら、より広く深い多文化教育の場となる可能性を探求することでもある。

⁶ 留学生と子どもたちの心の交流をテーマにした活動の報告書『平成17年度 留学生地域交流事業報告書』（日本学生支援機構名古屋支部）のp.82で名古屋大学大学院発達教育学研究科教授 藤山英順氏は交流を深めるためには「再会ミーティング」をするのが「常識」であると述べ、その重要性を指摘している。

⁷ 例えば、日本で異文化間教育研究の主導的役割を担っている「異文化間教育学会」は、2005年の特定課題研究を「異文化間教育研究と『日本人性』」とし、従来自明視されてきた「日本人性」や「異」のとりえ方について問いかけている。

8. 今後に向けて

学院設立10周年に行なわれたシンポジウムの基調講演を行なった増田義郎氏（当時、東京大学教授）は、その5年後である1992年が、コロンブスが新大陸に到着⁸してから500年周年にあたることについて次のように述べている。

「コロンブスの航海によって世界の一体化が始まり、その過程で植民地化や戦争が無数に発生した。この500年間は異文化間の争いの世紀といえる。これからの500年間は異文化が理解し合い、寛容になるにはどうすればいいか模索すべき時代となる。異文化の激しい接触の歴史をもつメキシコ国民と、長い鎖国が続き国際社会の経験がまだ少ない日本国民が、一つの学園で学ぶ日墨学院はこれからの500年を考える上で貴重な経験となる」（毎日新聞 1987年9月22日）

また一方、同じ年に学院が発行した機関紙の中で（日本メキシコ学院1987,p.36）、当時の研究員の加藤守孝氏（現在、九州大谷短期大学教授）は次のように述べている。

「日本の経済発展を背景にした日本熱的現象は必ず消え失せるでしょう。リセオの本当の力はそのようなものが消えた時にはじめて証明されるでしょう。リセオはそのために努力しなければなりません。」

上記二つの引用は、それから20年を経ようとしている現在の、世界と日本の現実を的確に言い当てたものであり、そのような世界の中で学院が担うべき役割への期待を示している。これからの500年という壮大な歴史を考えると、学院の30年の歴史は、まだ始まったばかりとも言えるが、その中には多くの努力や苦労があったことは容易に察することができる。設立の高い理想と深い思いを今後つないでいくためには、世界の異文化間教育研究・実践のこれまでの成果を検討し生かしながら、関係者の力を結集して支援すべきであると考える。

引用文献

- ・毎日新聞社編、1987年、『日本メキシコ学院十年の歩み』、毎日新聞社
- ・松本三四郎他、1972年、『総合学園建設運動趣意書 企画と提案』、発起人一同編纂
- ・Maria Esther Ibarra、1996、'Disciplina y Formalidad, El Modelo del Liceo Mexicano Japonés', Educacion 2001, Instituto Mexicano de Investigaciones Educativas, S.C.
- ・日本学生支援機構名古屋支部、2006年、『平成17年度 留学生地域交流事業報告書』
- ・日本メキシコ学院、1986年、『'85-'86 高校卒業文集 思い出をたいせつに』、日墨学院日本文化コース
- ・日本メキシコ学院、1987年、『われらの日本メキシコ学院1987年6月号, Nuestro Liceo Mexicano Japonés, Junio, 1987』
- ・佐藤群衛、1995年、「国際理解教育の実践上の課題～学校・学級の構造とのかかわりから」、『国際理解教育』Vol.1, 日本国際理解教育学会
- ・ウィルス・B.David、1994年、「複合文化と単一文化～日本の国際学校と多文化教育」、『異文化間教育』第7号, 異文化間教育学会

謝辞

今回調査を行うにあたって、学院設立10年（1987年）の頃を知る当時の教員や生徒たちから資料提供やご意見をいただきました。特に横浜市立茅ヶ崎台小学校校長遠藤伴雄先生には多大なご協力をいただきました。皆様に感謝致しますと共に、今後のご指導・ご協力をお願いいたします。

⁸ メキシコではこの史実を「アメリカ大陸発見 Descubrimiento del Continente Americano」ではなく「二つの世界の出逢い Encuentro de dos mundos」と呼ぶことが多く、西欧とは異なる歴史認識のよい例となっている。

添付資料

日本語版アンケート

あなたに当てはまる項の()の中に×をつけてください。下線部には、可能な範囲でご記入ください。

[A] あなたご自身について

- 国籍
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () メキシコと日本 (4) () その他 _____
- 日系人の場合、何世ですか。
 (1) () 2世 (2) () 3世 (3) () 4世 (4) () 5世
- 現在の住居
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () その他 _____
- 主な居住地
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () その他 _____
- 性別
 (1) () 女性 (2) () 男性

[B] あなたのお母様について

- 国籍
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () メキシコと日本 (4) () その他 _____
- 主な居住地
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () その他 _____

[C] あなたのお父様について

- 国籍
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () メキシコ・日本 (4) () その他 _____
- 主な居住地
 (1) () メキシコ (2) () 日本 (3) () その他 _____

[D] 日本メキシコ学院 (以下「学院」と記します) 在学について

- 在学時期 (西暦 _____年 ~ _____年) (西暦 _____年 ~ _____年) (2回目があれば)

2. 在学した学校レベルとコースの別

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| (1) () 幼稚園 | | |
| (2) () 小学校 | a () メキシココース | b () 日本コース |
| (3) () 中学校 | a () メキシココース | b () 日本コース |
| (4) () 高校 | | |

3. 入学の主な理由 (主なものをごひとつ選択してください。)

- (1) () 親の勤務のため。
 (2) () 日系であるため。

- (3) () 親が日本に興味を持っていたため。
 (4) () 自分自身が日本に興味を持っていたため。
 (5) () 学院のレベルが高かったため。
 (6) () その他 _____

[E] 学院在学時代を振り返って

1. 外国語 (スペイン語または日本語) 学習の授業はあなたにとってどうでしたか。

- (1) () たいへん好きだった。
 (2) () 好きだった。
 (3) () どちらともいえない。
 (4) () あまり好きではなかった。
 (5) () 全く好きではなかった。
 (6) () 覚えていない。
 (7) () その他 _____

2. 外国語学習の授業についての印象に残っていることやご意見をお書きください。

3. 異文化 (メキシコ文化または日本文化) 学習の授業はあなたにとってどうでしたか。

- (1) () たいへん好きだった。
 (2) () 好きだった。
 (3) () どちらともいえない。
 (4) () あまり好きではなかった。
 (5) () 全く好きではなかった。
 (6) () わからない / 覚えていない。
 (7) () その他 _____

4. 異文化学習の授業について印象に残っていることやご意見をお書きください。

5. 授業以外の文化交流活動 (行事、交流型クラブ、課外活動など) はあなたにとってどうでしたか。

- (1) () たいへん好きだった。
 (2) () 好きだった。
 (3) () どちらともいえない。
 (4) () あまり好きではなかった。
 (5) () 全く好きではなかった。
 (6) () わからない / 覚えていない。
 (7) () その他 _____

2. 現在までのあなたの生活の中で、学院は相手の国との関係においてどのような影響を与えてきたと思いますか。

(複数回答可)

- (1) () 相手国と実質的な関係を持つようになった。
- (2) () 相手国に興味を持つようになった。
- (3) () 相手国に共感するようになった。
- (4) () 相手国を客観的に見られるようになった。
- (5) () 相手国に否定的感情を持つようになった。
- (6) () 相手国との関係で特に影響はなかった。
- (7) () わからない。

3. 学院での教育は、現在のあなたの生活にどのような影響を与えていますか。各項について () に当てはまる数字を書いてください。

学院で教育を受けたことによって、私はこれまでに、

- (1) () 組織の規律や規則を大切にするようになった。
- (2) () チームワークがとれるようになった。
- (3) () 統一性を大切にし、自立つことを避けるようになった。
- (4) () 先輩後輩の上下関係を大切にしようになった。
- (5) () 礼儀や形式を大切にしようになった。
- (6) () 自分の目標に向かって根気強く努力するようになった。
- (7) () 自律的で責任感を持つようになった。
- (8) () 行動する前によく考えるようになった。
- (9) () 想像力や自発性が高まった。
- (10) () 主体的に考え行動するようになった。
- (11) () 自己表現やコミュニケーション能力が高まった。
- (12) () 上下関係にとらわれず人と対等に接するようになった。
- (13) () リーダーシップを持つようになった。
- (14) () 自由や平等に価値を置くようになった。
- (15) () 母国を客観的に見られるようになった。
- (16) () 日本や日本語に関する活動や仕事をしようになった。
- (17) () メキシコやスペイン語に関する活動や仕事をしようになった。
- (18) () 国際的な活動や仕事をしようになった。
- (19) () 世界的な視点を持つようになった。
- (20) () 理解や寛容の心を持って他者と接するようになった。
- (21) () 高い学歴を持つに至った。
- (22) () 高い経済的収入を得るようになった。
- (23) () より高い社会階層に属するようになった。
- (24) () 自分自身に自信や満足感を持つようになった。
- (25) () 人生に目的や夢をより多く持つようになった。

- 1... はい、非常に
- 2... はい、ある程度
- 3... どちらともいえない
- 4... いいえ、あまり
- 5... いいえ、全く
- 6... わからない

6. 学院の文化交流活動について印象に残っていることやご意見をお書きください。

7. 日本メキシコ学院の勉強・生活環境はあなたにとって文化学習の観点からどうでしたか。

- (1) () とてもよい環境だった。
- (2) () よい環境だった。
- (3) () どちらともいえない。
- (4) () あまりよい環境ではなかった。
- (5) () 全くよい環境ではなかった。
- (6) () わからない / 覚えていない。
- (7) () その他 _____

8. 文化学習の観点から、学院の勉強・生活環境について印象に残っていることやご意見をお書きください。

9. 学院在学時、相手の国についてのあなたの知識が増えたと思いますか。

- (1) () はい、非常に (2) () はい、ある程度 (3) () どちらともいえない
 - (4) () いいえ、あまり (5) () いいえ、全く (6) () わからない
10. 学院在学時、相手の国に対するあなたの興味が大きくなったと思いますか。
- (1) () はい、非常に (2) () はい、ある程度 (3) () どちらともいえない
 - (4) () いいえ、あまり (5) () いいえ、全く (6) () わからない

11. 学院在学時、相手の国に対してより共感するようになりましたか。

- (1) () はい、非常に (2) () はい、ある程度 (3) () どちらともいえない
- (4) () いいえ、あまり (5) () いいえ、全く (6) () わからない

12. 学院での勉強や生活全般について印象に残っていることを書いてください。(規則、友人や教員との関係、などについて)。

[F] 現在の状況について

1. あなたの現在の主な活動は何ですか。

- (1) () 学生 (2) () 家庭 (3) () 会社員 (4) () 経営者 (5) () 教員
- (6) () 研究者 (7) () 翻訳家 (8) () 通訳 (9) () その他 _____

4. その他、特に学院の教育によってもたらされたと考える影響があれば述べてください。

5. 現在のあなたの日本語能力はどのくらいですか。

- (1) () 母語である。
- (2) () 母語に近い程度。
- (3) () 日常生活で使える程度。
- (4) () 初級程度。
- (5) () 単語や表現を少し覚えていく程度。
- (6) () ほとんど覚えていない。

6. 前問の答えが3(4)(5)(6)の場合、今後勉強したいですか。それはなぜですか。

- (1) () 現在勉強中である。(理由：)
- (2) () 近い将来勉強したい。(理由：)
- (3) () いつか勉強したい。(理由：)
- (4) () 勉強したいとは思わない。(理由：)

7. 現在のあなたのスペイン語能力はどのくらいですか。

- (1) () 母語である。
- (2) () 母語に近い程度。
- (3) () 日常生活で使える程度。
- (4) () 初級程度。
- (5) () 単語や表現を少し覚えていく程度。
- (6) () ほとんど覚えていない。

8. 前問の答えが3(4)(5)(6)の場合、今後勉強したいですか。それはなぜですか。

- (1) () 現在勉強中である。(理由：)
- (2) () 近い将来勉強したい。(理由：)
- (3) () いつか勉強したい。(理由：)
- (4) () 勉強したいとは思わない。(理由：)

9. 今考えて、学院がこうだとよかったと思う点があれば、記入してください。

10. 今考えて、学院在学時代に自分自身がこうするとよかったと思う点があれば、記入してください。

11. 学院の将来に期待すること、または他にご意見などありましたら記入してください。

ご協力ありがとうございます。今後は調査研究にご協力いただければ、可能な範囲でご連絡先をご記入ください。

お名前：

住所：

Email：

Tel & Fax：

回答結果 (回答者の在籍コース M:メキシコ 日:日本)

[A] (回答者自身)

	1. 国籍			2. 日系人の場合何世か				
	メキシコ	日本	両方	その他	二世	三世	四世	五世
メ・コース	7	0	2	0	2	4	0	0
日・コース	1	5	3	1	3	1	0	0
合計	8	5	5	0	5	5	0	0

[B] (母親)

	3. 現在の居住地			4. 主な居住地			5. 性別	
	メキシコ	日本	その他	メキシコ	日本	その他	男	女
メ・コース	8	1	0	9	0	0	7	2
日・コース	2	7	0	3	6	0	3	6
合計	10	8	0	12	6	0	10	8

[C] (父親)

	1. 国籍			2. 主な居住地			5. 性別	
	メキシコ	日本	両方	メキシコ	日本	その他	男	女
メ・コース	7	1	1	0	9	0	0	0
日・コース	1	8	0	0	5	4	4	0
合計	8	9	1	0	14	4	4	18

[D] 学院在学について

	1. 国籍			2. 主な居住地			5. 性別	
	メキシコ	日本	両方	メキシコ	日本	その他	男	女
メ・コース	8	1	0	0	8	1	0	0
日・コース	2	7	0	0	4	5	0	0
合計	10	8	0	0	12	6	0	0

[E] 在学時代に振り返る

	2. 在学レベル		
	幼稚園	小学校	中学校
日・コース	13	9	8
メ・コース	8	9	10

[F] 現在

	3. 入学の理由		
	メ・コース	日・コース	合計
1) 親の勤務	2	5	7
2) 日系人	5	2	7
3) 親の興味	0	0	0
4) 自分の興味	0	0	0
5) 高いレベル	1	0	1
6) その他	1	2	3
合計	9	9	18

[E] 在学時代に振り返る

	1. 外国語の授業			3. 異文化学習の授業		
	メ・コース	日・コース	合計	メ・コース	日・コース	合計
1) たいへん好き	0	2	2	1	2	3
2) 好き	3	2	5	5	3	8
3) どちらとも	0	3	3	1	2	3
4) あまり好きでない	3	1	4	0	0	0
5) 全く好きでない	2	1	3	0	1	1
6) 覚えていない	0	0	0	0	1	1
7) その他	1	0	1	2	0	2
合計	9	9	18	9	9	18

	5. 文化交流活動			7. 学院の勉強・生活環境		
	メ・コース	日・コース	合計	メ・コース	日・コース	合計
1) たいへん好き	4	1	5	1	5	6
2) 好き	3	6	9	7	3	10
3) どちらとも	1	1	2	1	0	1
4) あまり好きでない	0	0	0	0	0	0
5) 全く好きでない	0	1	1	0	0	0
6) 覚えていない	0	0	0	0	0	0
7) その他	1	0	1	0	1	1
合計	9	9	18	9	9	18

	9. 在学時に相手の国語の知識が増えたか			10. 興味が大きくなったか		
	メ・コース	日・コース	合計	メ・コース	日・コース	合計
1) 非常に	5	4	9	5	2	7
2) ある程度	2	4	6	2	5	7
3) どちらとも	0	1	1	0	1	1
4) あまり	1	0	1	1	0	1
5) 全く	1	0	1	1	0	1
合計	9	9	18	9	8	17

	11. 共感するようになったか		
	メ・コース	日・コース	合計
1) 非常に	5	0	5
2) ある程度	1	7	8
3) どちらとも	1	1	2
4) あまり	1	0	1
5) 全く	1	1	2
合計	9	9	18

[F] 現在

	1. 主な活動		
	メ・コース	日・コース	合計
1) 学生	1	3	4
2) 家庭	0	1	1
3) 会社員	4	5	9
4) 経営者	4	0	4
9) その他	0	0	0
合計	9	9	18

2. 相手国に関する現在への影響	
メ・コース	日・コース
0	5
1) 実質的關係	5
2) 興味	6
3) 共感	4
4) 容認	0
5) 否定的感情	0
6) 特になし	1
7) わからない	0
合計	16

3. 学院教育の現在の生活への影響 (各回答番号に対する人数)						
回答番号→	小計					
	1	2	3	4	5	6
メ・コース	3	2	3	3	6	5
日・コース	3	2	3	5	6	3
合計	6	4	6	8	12	8
1) 規律・規則	3	2	3	3	6	5
2) チームワーク	3	2	3	5	6	3
3) 統一性	1	2	4	1	5	3
4) 先輩・後輩関係	4	1	1	2	5	3
5) 礼儀や形式	5	3	2	2	7	5
6) 目標への根気・努力	4	1	3	2	7	3
7) 自律性・責任感	2	1	4	4	6	5
8) 行動する前に考える	1	2	3	3	4	5
9) 想像力や自覚性	2	3	2	4	4	5
10) 主体的考え・行動	3	1	1	5	4	6
11) 自己表現・コミュニケーション能力	2	1	1	3	3	4
12) 対等な人間関係	2	2	3	4	5	6
13) リーダーシップ	2	0	3	5	5	5
14) 自由と平等	2	3	1	5	3	8
15) 母国を客観視	3	2	1	7	3	9
16) 日本に関する活動	2	4	1	1	4	5
17) メキシコに関する活動	0	3	3	2	3	5
18) 国際的活動	1	2	4	2	5	4
19) 世界的視点	1	0	5	6	6	6
20) 他者への理解と寛容	3	3	2	3	5	6
21) 高い学歴	1	0	4	3	5	3
22) 高い収入	1	0	3	1	4	1
23) 高い社会階層	1	0	3	1	4	1
24) 自信・満足感	1	0	5	3	6	3
25) 人生に目的や夢	2	2	3	3	5	5

5. 現在の日本語能力	
メ	日
0	6
1) 母語	6
2) 母語に近い	3
3) 日常生活に使える	0
4) 初級	0
5) 単語や表現を少し覚えている	0
6) ほとんど覚えていない	0
合計	9

6. 前問回答が(3)(4)(5)(6)の場合今後勉強したいか	
メ	日
2	0
1) 現在勉強中	0
2) 近い将来勉強したい	4
3) いつか勉強したい	2
4) 勉強したいと思わない	0
合計	8

7. 現在のスペイン語能力	
メ	日
8	2
1) 母語	2
2) 母語に近い	3
3) 日常生活に使える	1
4) 初級	1
5) 単語や表現を少し覚えている	0
6) ほとんど覚えていない	0
合計	9

8. 前問回答が(3)(4)(5)(6)の場合今後勉強したいか	
メ	日
0	0
1) 現在勉強中	0
2) 近い将来勉強したい	3
3) いつか勉強したい	1
4) 勉強したいと思わない	0
合計	4